慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マーケティング論の方法論的考察 : その1 マネジリアルな側面について(1)
Sub Title	A Methodological Consideration of Marketing Theory : Part 1: in the managerial aspect (1)
Author	肥田(旧姓佐藤), 日出生(Hida(formerly Sato), Hideo)
Publisher	
Publication year	1971
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.14, No.4 (1971. 10) ,p.193- 210
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19711030-04050246

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マーケティング論の方法論的考察

その1　マネジリアルな側面について(1)

肥　田　日出生
(旧姓佐藤)

はじめに

マーケティング論を志す若い学徒が一定期間の学習を終え，主体的な研究にとりかかり，しばらくすると，そのほとんどが遭遇するのが方法論の問題である。彼等は，その方法論がいかにして確立されうるか，ということを自問する。こうした問題が明確なものとなって出現するのは，ひとりマーケティング学徒の成長過程におけるだけではない。広く，いわゆる経営学やマーケティング論それ自体に目を転じても，それらが生成し，生長を続けた結果，他の学問分野の研究者からもその存在を認められはじめるのに並行して，「経営学は科学か？」あるいは，「マーケティングは科学か？」といった問いかけが開始されたのは周知のことである。(1) その結果マーケティング論の分野でも研究者による様々な考察がなされたが，わたくしの目を通してきた論文に限っていえば，それらは必ずしも一つの立場から明確な解答を与えているとはいえないように思う。それは，なんといってもこのテーマの難解さに主たる原因を持つものであろうがそればかりではない。われわれのよく知っているように今日のマーケティング論は，流通事象に関する諸知識の体系といった側面を持つものであるが，他面において企業，とりわけ寡占的製造業者の経営論としての性格をもは

(1) たとえばマーケティングの分野では，R・バーテルスの1951年の論文，Can Marketing be a Science？や，翌年のK. D. ハッチンソンのMarketing as a Science: An Appraisal などがそれである。

っきりと持つようになっている。この両側面を一括して扱うとどういうことになるだろうか。

たとえば，「マーケティングは科学か技術か？」という論議が展開される場合を考えてみよう。そこでの技術とは一体何を意味しているのであろうか。それは経営学をはじめとするマネジリアルな学説の一つの特徴たる技術論的性格を指すとみることもできるが，それだけではない。流通知識には経済学者によってみのがされた流通行動論が重要な位置を占めるのであるが，そうした論議の持つ技術論的性格を意味するとも考えられる。このような意味が混同されやすい。ひとたび混同されると，論議はそれが進むにつれて，ばくぜんとしたものになり，ついには実りの少ないものとなってしまう。いくつかの論文の不明確さは，わたくしの読解力のとぼしさはもちろんだが，さらにこうした点にも原因を持つのではなかろうか。このような反省をしてみると，マーケティング論のもつ二つの側面を区分して別々に考察をするという試みは，若干の意味を持つのではないか，と思えてくる。そこで，その試みを，まずマネジリアルな側面について考えることからはじめようと思う。その手続きは，広く，マネジリアルな側面を持つ他の学説にも――たとえば経営組織論にも――通用するような一般的な方法論的考察によるものとなるだろうから，こうした試みが，他のマネジリアルな学説諸分野との共通の議論の場を形成する一つの機会となるならば，それは予想外に好ましい副産物といえるだろう。が，当面希望するのはマネジリアルな側面の性格が明らかになり，かつ，それによりマーケティングのいま一つの側面の問題がより明確なものとなって浮かび上ることである。

第一節　認識の一方法としての科学

さて上に例示した「マーケティングは科学か？」とか，あるいは「マーケティングは技術か？」といった問題は実はマーケティング方法論の中心的な問題の一つである。われわれも論議を続けていくうちに，いずれかの場所でこの種の問題に直面せざるをえないだろう。ところでこうした論議に立ち入るには，まず前もって，論者の科学に関する考え方を明示することが必要だろうと思

う。こうした努力を欠いた論議は，出発点からばくぜんとしたものを内に含みながら展開されるものであり，それがすすむにつれて，不明確さを増してゆくのが常である。実際，“科学，技術論議”はひとりマーケティングだけでなく，上にのべたように，いわゆる経営学——広義の経営的な学，つまりわたくしのいうところのマネジリアルな学，ではなく現在一般に経営学と称されている分野の学——においてもさかんなのであるが，そこにおいてもたとえばただ単に科学を“Why”を追求する学とし，技術を“How”の追求であるとのみ示して，専門的諸理論，諸概念の検討にたちいるといったものが少なくない。つまり，この種の論議におそらく必要とされることは，“Why”の追求，および“How”の追求とは，各々いかなる方法上の特徴を持つのかをいま一歩立ち入って考察し両者の間の関係についての見解をあらかじめ明らかにしておくことであろう。(2) こういうわけで，わたくしはまず，科学に関する考え方を述べてみようと思う。

さてそこで科学とは一体何であろうか。いずれにせよその答えは，科学と称すべきものの特徴を述べることになろうが，その特徴はどこでとらえたら良いであろうか。一つのとらえかたは，様々な分野の科学的知識と称されるものの状態に求める方法である。しかし，こういった，いわば科学的認識の具体的な成果のありさまに科学の特徴を求めるものは，その対象が多様な形態をとっているがゆえに，かえって特徴的な把握が出来なく終ることが多い。(3) こういう把握はできるだけ単純な形でなされるのが好ましいのであるが，そのためには，むしろ科学を一つの認識の方法として注目し，その認識のパターンの特徴によってとらえるのが良いと考える。

(2) たとえば雑誌ビジネス昭和41年5月号における“経営学の本質と領域”なる特集に，わが国経営学会の八氏が各々持論を展開しているが，そこで用いられている科学という用語はほとんどみな無定義であり，文中における意味も明らかでない。

(3) たとえば，バーテルスは彼の論文の中で，科学，哲学，教義，技術なる用語を用いて論述を行なうさい，形態論的にのべてあるウエブスター大辞典のものを引用して，その概念を定めようとしているが，結局それは不明確な規定に終っている。Robert Bartels, Can Marketing be a Science?, Journal of Marketing, Vol. 15. (January, 1951)

それでは科学は認識のやり方として，どういう点に特徴を持つかというと，それは次のようなものである。

(1) 認識の対象がわれわれ一般人の経験できる領域の事象に限られているという点。

(2) その対象，を様々な観点からする概念を構成することによって複数の要素としてとらえるという点。

(3) これらの要素を因果の系列に結びつけるという点。(4)

このような特徴を持つ科学の方法をさらにはっきりさせるためには他の認識の方法と対比させるのが良いだろう。ここでとりあげる方法は宗教と芸術の方法である。

宗教の方法の科学の方法に対する明白な相違点は，上述の科学の方法の特徴点(1)に対するものである。つまり宗教の方法では，認識の可能なる対象に一般人の経験できない，いわば非経験の領域の事象をも含める。具体的には，神の声だとか，霊魂とかいったものが，認識可能な要素として因果係列の中に加えられる。この間の事情を山火事という例について考えてみるならば次のようになるであろう。科学の方法で認識する場合は，まず，その現象を成立させる原因となるような要素を経験できる範囲内に見出す。次にそれらの要素と関連させて，たとえば，煙草のすいがら→発火→山火事，とか，あるいは強風，→木々のまさつ→発熱→発火→山火事，といったぐあいにして認識されることだろう。(5) 他方，宗教の方法による場合それはたとえば，現代の物的豊富さ→現代人の驕慢→神の怒り→山火事といったぐあいになろう。いうまでもないが神の怒りの次に強風→木々のまさつ→発熱……であっても良いし，煙草のすいがらの

(4) むろんこの場合，一定の論理学上の規則に準拠することが必要である。
「すべて学問研究にたずさわるときには，論理学と方法論との規則の妥当性というものが，その前提をなしている」
M・ウェーバー，出口勇三訳，職業としての学問，ウェーバーの思想，河出書房新社 p. 150，ウェーバーはここでは「学問」と「科学」とを同義に用いている。

(5) このことは美学のような人文科学で対象とされる現象についても同じである。ある芸術品が存在する場合，これが生ずるときの条件を美学では，その諸要素をとり出して根拠づけようとする。

残り火→発火→山火事であってもよい。要するに諸要素の因果的連関の中のいずれかの個所に，神の怒りとか神の意志とかいった，われわれ一般人には共通に経験することはできない要素が加わって認識されていることが宗教の方法の特徴である。

このように考えると，科学も宗教も各々一個の認識の方法であることがはっきりする。それではわれわれはこの二つの方法をどのように考えたら良いであろうか。それは，確固として信ずる宗教を持たないわれわれ一般人にとっては次のようになるのであろう。

つまり，もし信者ならば，彼は奇跡も啓示も認識可能なのだろう。そして科学は科学の立場から「奇跡や啓示についてはなにも知らない」(6)だけである。他方確固とした宗教を信ずるものはやはり，科学は，自分たちの知っている奇跡や啓示といったものを認識可能な範囲から除外する一つの手法である，といったぐあいに考えることになるだろう(7)。

さて，いま一つは芸術の方法であるが，この方法を論ずるに際しては，前もって実在の認識に関する立場を明示しておかなければならないだろう。実在の認識については様々な観点があるが，それを大きく次のように分けることもできる。第一の観点は，実在を物自体として考えて不可知なものとするいわゆる不可知論のように，その認識を不可能とする立場である。第二の観点は実在の認識を可能とするものである。そのうちには，直観という超越的能力の存在をみとめ，それによって認識が可能となるとする立場がある。この際の直観というのは，われわれをある対象の内部に移し入れて，この対象が持つユニークな

(6) ウェーバー，職業としての学問，前掲書 p. 155.
この点を明確に理解していないと，いわゆる科学主義に陥り易くなる。つまり，われわれは急速に成長しつつある科学に信頼をよせるあまり，それが非経験の領域の事象の存在ないしはその認識の確実性を否定できるとまで思ってしまう。

(7) しかしながら，信者にとってこのようなことが，実際上可能なのかどうかということは難問である。ウェーバーのいうように学問（科学と同義に用いている）も一つの思想像である（ウェーバー，前掲書，p. 146. 参照）。このような，科学を単なる手法として受け入れて自らの信念と併存させることは心情的にどんなぐあいになるか，といったことについてはわたくしには容易に答えることは出来ない。

ところ，従って表現できないところにわれわれを一致させるような“共感”である。わたくしはこの観点をベルグソンに負うている。そしてこの観点は，わたくしにとって長い間難解なままであった。マックス・ウェーバーの“理念型”を理解することを若干ながら可能にしてくれつつあるように思える。また“動機の意味理解”という方法がいかなるところに客観性の根拠を持つかということをもいくらか明らかにしてくれたようにも思う。これらのことについては後述するつもりである。

この後者の観点に立ってみると，芸術の認識方法とは，上にのべた意味での直観を用いて対象に向かう方法であり，概念を用いないものである。前述した科学の方法の特徴点でいえば，(2)に——従って(3)にも——明白に対応するものであろう。こうした事を具体的に考えるには小林秀雄氏が，例をあげて適切に説明しているので，それを引用してみるのが良い。氏は概念を用いる方法と対比させて次のようにいっている。——たとえばわれわれが野原を歩いていて一輪の美しい花の咲いているのを見たとする。見るとそれは菫の花だとわかる。何だ，菫の花か，と思った瞬間にわれわれはもう花の形も色も見るのを止めるだろう。われわれは心の中でお喋りをしたのである。菫の花という言葉がわれわれの心のうちに這入って来れば，われわれはもう眼を閉じる。つまり，菫の花だと解るという事は，どういうことかというと，それは花の姿や色の美しい感じを言葉で置き換えてしまうということなのである。逆に，そういうことをせずに，言葉の邪魔の這入らない花の美しい感じをそのまま持ち続け，花を黙って見続けていれば，花はわれわれに，かつて見た事もなかったような美しさを，それこそ限りなく明かすこにになろう。画家というものは，みなそういう風に花をみているのである。(8)

かくして，彼に感動を与えた美しさがカンバスに定着させられるのであるが，このような仕方が，前述した“共感”による芸術の認識方法であろう。こうした認識方法がわれわれ多くのものの日常生活に縁遠いのはなぜか。前述の小林氏はそれを次のように説明している。——わたくしたちが普通，生活の中

(8) 小林秀雄，美を求める心，芸術随想，p. 86. 参照。

でどんなぐあいに眼を働かせているかを考えてみよ。特になんの目的もなく物の形だとか色合いだとか，その調和の美しさだとか，を見るという，そういう風に眼を働かすという事がどんなに少ないかにすぐ気付くだろう。たとえば，時計を見るのは時間を知るためである。だから時計を見ても針だけしか見ない。リンゴは食べるもので椅子は腰掛けるものだ。だからリンゴがどんなに美しい色合いをしているか，つくづく眺めることは少ない。毎日坐っている椅子がどんな形をしているか，はっきりと見定めることもほとんどない。(9)

一方芸術家は物を自分の実用のためにみるのではなく，ただ物を見るために見る。ベルグソンによれば，これらの人には意識ないしは五感の一つがなんらかの側面で生まれながらにして“実用”と遊離している。この遊離がどの感覚のまたは意識の遊離であるかに応じて，彼らは，画家や彫刻家になったり，音楽家になったり，あるいは詩人になったりして，各々の分野を形成しているにすぎないのである。だからわれわれは，どの分野の芸術においても，われわれよりもはるかにより直接的な実在に対する洞察を見出すのである。(10)

さてそれでは，こうした芸術の認識方法はわれわれの関心の中心である科学の認識方法に対してどのように位置していると考えられるのであろうか。芸術とちがって科学はとにかく混沌とした原始的直観から対象を供給してもらうとそれを思考によって妥当なしかたで秩序だてようとする作業をはじめる。その対象に関する観点を増大させながら，適切な概念や判断をもとめてゆく。その際科学が用いることを前提としている概念というのはいうなれば直観的な内容を論理的に加工し細工をほどこしたものである。

その概念が適当であるためにはいかなることが必要か。第1に，直観的な内容が豊かでなければならず，第2に，論理的細工が精巧でなければならないだろう。この第1の条件をみたすためには，われわれはまず，対象に関連を持つ古い概念を一時的に放念しなければならないだろう。そして，実在に対して自

(9) 小林秀雄，前掲書，p. 85. 参照。

(10) ベルグソン，矢内原伊作・訳，変化の知覚，ベルグソン全集（白水社）7，pp. 172～173. 参照。

由な直観を働かせる。これすなわち，いまのべた芸術の認識方法にほかならない。つまり，科学認識にとっても芸術の認識方法が——たとえそれに費される時間が比較的短いとしても——一つのステップとして位置づけられているのである。そしておそらく科学的認識を試みようとするものにとってそのステップが前述した感覚の先天的な遊離を前提とするかどうかは決定的な問題ではないだろう。むしろ，そのステップを意識的にとろうとするかどうかが重要であるように思う。以上ここで述べた科学に対する芸術の認識方法の位置を，ベルグソンの言葉を借りていうならば——「もし最初に既成諸概念をしりぞけ，現実の直接的ヴィジオンを獲得し，しかる後，この実在をその分節を考慮しながら細分してゆくならば，その時こそ自己の考えを表明するために形成すべき新しい諸概念は，対象の寸法に合わせて裁断されるのである」[(11)] マックス・ウェーバーのいうところの“するどい概念構成”[(12)] もまた，かかる手法によってなされうるものであろう。

第二節　マネジリアルな学説の性格

I　政策論中心の不安定性

——マックス・ウェーバーの社会学の方法に照らして——

ある科学の認識方法を用いる場合にも，その認識対象が異なれば，おのずと，方法にもそれなりの特徴が生じてくる。マネジリアルな学説の中心的認識対象であるところの企業とか経営活動とかをみる場合にもそれはいえる。だがこういった場合に即座に立ち入る前にわれわれはまず，広く，社会現象を対象とする社会科学について考察してみようと思う。いうまでもないが，社会科学は，自然現象を対象とする自然科学とちがってその認識対象が人間であるというところから様々な方法上の特徴を持つことになるからである。

ところでこの問題をときほぐしていくために，その手がかりとして，わたく

(11)　ベルグソン，真理の成長・真なるものへの邇行的運動，前掲書，p. 32.

(12)　ウェーバー，出口勇三訳，社会科学および社会政策の認識の「客観性」，前掲書，p. 118. 参照。

しはマックス・ウェーバーの社会学ないしは社会科学の方法にみられる諸論を援用したいと思う。それは一つには，彼がマーケティングでは外すことのできない，人間の心ないしは動機の問題を科学の中で処理しようとして苦心し，工夫をこらした結果，それに成功し非常に意味深い社会学方法論をつくりあげた最初の人であったからであるが，そればかりではない。彼の方法論の学会への影響は意識されていると否とにかかわらず，いまだにきわめて広くかつ深いものがあるように思われるからである。実際マーケティングにおいても，ひとたび方法論議に立ち入るならば，ウェーバー的な思考様式がほとんどのところで基底に流れているのを知らされることがしばしばある。いや，たったいまわたくしが前節で述べた科学，宗教，芸術の認識方法にしても，いくつかの部分はすでに彼によって考察し終えられているとも考えられうるものなのであって，自分のしていることは全く無駄なことなのではないかとの思いに，論述しつつとらわれることがたびたびであった。(13) 少なくとも前節の論議はこれから援用する彼の方法論にかなり良くフィットすることはまちがいない。そこでわれわれは，いわば社会科学方法論の重要な思想的源泉の一つとでもいうべき彼の立場からマネジリアルな学説の問題の所在を照らし出してみようと思うわけである。

さて自然科学にくらべて社会科学の認識上の特性はどこにあるかというと，一般的には次のようなものをあげることができろだろう。すなわち第一には，対象の規則性が——その本質的なところはともかくとして——小さいようにみえるということである。第二には，対象に精神現象が含まれているということ

(13) 大塚久雄氏の次のような論述は，そうした懸念をいくらか軽くしてくれた。——「マックス・ウェーバーは……むしろ，方法論学者であるまえにすぐれた社会科学者であり，……じつは，そうした彼の社会科学の分野での具体的な業績のなかから，方法論議のなかには必ずしもあらわれていないが，具体的な業績では盛んに駆使されているような，そういう独自な方法を読みとることができるとも思うんです。……私にはどうしても，彼が方法論という形で展開しているものから本質的にはみ出すかもしれないもののなかに，彼の社会科学の方法——かなり広い意味になるでしょうが——を特徴づけるようなものが，いっそうはっきりとみられるんじゃないか……」大塚久雄，社会科学の方法，pp. 53～54.

である。これは第一の特徴を形成する主たる原因の一つであろう。第三には，採用される価値観点が信念や思想の相違によって比較的大きな多様性を持つということである。そして第四には，価値判断が介入しやすい，ということである。ここではそのうち第二番目の対象としての精神現象の存在という点について考えていってみようと思う。(14)

人間の精神現象は，肉眼で見たり，手にとってさわってみたりできるものではないので，それが客観性を重視する科学の認識対象となりうるかどうかということは，人間を扱う研究分野では常に問題とされるべき性格のものである。ところで本来それは観察できないものであるので，認識対象から除去するものであるとする考えをもっとも明白に打ち出したのは心理学の分野におけるワトソンであろう。ウェーバーを考えるにこのワトソンと対比させてみよう。

彼によれば，一般に心的とかあるいは精神的とかいわれるような概念は，中世的な遺物であって，非科学的である。科学としての心理学は，他の自然科学と同じように，客観的に観察，測定し得るものをその対象としなければならないと主張した。そして，人間や動物において，客観的に観察，測定しえるものは，それらの現わす行動を外にして何もないと考えたのである。したがって，彼は，実験的に設定された刺激条件とそれに対して生活体の現わす反応，すなわち行動との間の一義的な相関関係を明らかにすることによって，行動に関する法則を見出し，それに従って行動を予測し，さらに進んでこれを支配することができるようになるということを心理学の任務と考えたのである。これが行動主義心理学と呼ばれる彼の心理学のとる立場であった。(15)

ウェーバーは分野こそちがえ，ワトソンとは対照的な立場に立っている。つまり，彼によれば，社会学とは社会的行為の主観的に思われた意味を解明しつつ理解し，それによってその経過と影響を因果的に説明しようとする一つの科

(14) この点をとりあげるのは，ウェーバーの方法をさぐる手がかりとして好都合であると同時に，マーケティングの行動論的側面に検討を加える際の予備的考察にもなりうると思うからである。

(15) 高木貞二，心理学，pp. 4～5. 参照。

(16) マックス・ウェーバー，阿閉，内藤訳，社会学の基礎概念，p. 8. 参照。

学だということになる。[16] この「主観的に思われた意味を解明しつつ理解する」のが，いわゆる動機の意味理解という手法であった。この点は周知のとおりといってよいであろう。社会科学のばあいには対象が自然ではなく意識をもち行動する，そうした生きた人間であるので，その因果連関を確実に追いかけていくには，自然科学にはみられない独自な方法，つまり動機の意味理解という手続きをどうしてもふまねばならない。いや，ふまねばならないというのみならず社会科学では，単なる外面的な経験によって得られた規則性に加えて，動機の意味理解という手続きをとることによって，因果連関の認識が成り立つばかりか，いっそう確実になる，とウェーバーは主張するのである。

ワトソンの行動主義心理学は，いわゆる心的，精神的といわれるような概念をすべてしめ出してしまうものであって，心理学という分野でこうしたいわば逆説的な方法をとったという意味でもわれわれの観点からしてとりわけ特徴的なものであるといえる。彼の意図は心理学を実験科学として強く押し出そうとするところにあったといわれるが，その意図はともかくとしてやはりそこには認識論的なあやまりがあったといわざるをえないであろう。つまり，彼には客観的ということと物理的ということとの混同があった。科学としての心理学の対象は客観的でなければならないから，したがってただちにまたそれは物理的でなければならないと考えた。しかしながら科学の出発点が経験であるとしても，その経験そのものは材料であり，それ自身，物的とか心的とかいうべきものではなく中性的なものである。それを特定の学問的なわくの中に取りいれる仕方にしたがって心的と呼ばれたり物的と呼ばれたりするにすぎない。こうした意味において，ウェーバーがこころの現象を科学の認識対象に含めたのは少なくとも出発点においては誤りではないといえる。

それではこの対象を認識すべき動機の意味理解とはどういう手続きなのであろうか。それが，人々の行動を，どういうわけで，そういう行動をするか，を追体験によって理解するというものであることをわれわれはよく知っている。この追体験という作業についていくらか私見をまじえながら考えてみよう。いま，ある脚本に描かれた一人の人物を演ずるという仕事に直面した俳優がいる

とする。彼はその脚本から歴史的背景を知り，その人物の性格を考え，個々の場面での感情の動きを推察するだろう。ある歴史物を書こうとしている小説家の場合はどうか。彼は集められた資料から各々の状況における歴史上の人物の心情に思いをはせるであろう。これらの精神的作業を独立にみると，それらは，やはり一種の追体験であって社会科学者のなすべき追体験と質的には同じものであると考えられる。社会科学者がたとえばある状況でのシーザーの動機を意味理解しようとするときにもやはり，資料から想定されるシーザーのおかれた立場に自分からの感情を移入して追体験することになるからである。

こうした理解のし方は一般には主観的解釈と思われている。しかしながら，それが科学の認識であるかぎり，主観的であってはならず，客観性を主張しうる根拠を持たねばならない。その根拠は一体どこに求められるのであろうか。俳優や小説家との条件の相違を考えてみよう。俳優の場合は与えられた状況が脚本家の創作によるものである。小説家の場合は，はせた思いが検証に耐えねばならぬという義務を負っていない。むろんこの点については俳優の推察も同じである。それでは，状況が創作によらず，推察が検証されるべきものならば，それで客観性は保証されうるだろうか。そうしたことは，必要条件である。しかし十分条件ではないであろう。検証資料というものを考えてみれば良い。あたりまえのことであるが資料それ自体はビジブルなものであって動機そのものではない。

だから一般には同一の資料から複数の動機が推察できるのであり，逆にいえば，いくつかの動機が同一の資料でもって“根拠”づけられうるのである。この問題は資料をいくつつみかさねても決して解消することができないのである。ある人はいうかもしれない。考察されている人物のその状況における動機を記した資料がある場合はどうか，と。しかしその場合でもやはり資料の信頼性は十分問題となりうるであろう。他の諸資料との関連からやはりその“意味”が問われねばならないだろう。このように考えると，資料というものは，追体験の客観性を窮極的に保証してくれるものでは決してないことがわかってくる。

それでは，どこに客観性の根拠が求められうるのか，われわれには，追体験という動作そのものをいま一歩すすめて考えてみるという方向が残されている。次にこの方向をたどってみよう。追体験とはいかなる作業か。それは，ある状況に立っている対象をつきはなして分析するのではなく，むしろまずその対象に自らの心をそって立たせるという試みであろう。そうしていると，われわれの心の内にはある種の共感が得られるのであろう。感情が移入されたとは，この共感が得られることをいうのだろう。さてこの共感とは何か。われわれの心の内には様々な心的な過程，様々な動機が経験として残されている。このいわば多数の内的な経験があたかも共鳴箱のように存在していて，そうした心をよりそわせていると，そのうちで，対象の内的な過程，つまり動機に合ったものが共鳴しはじめる。これが共感というものの実体であろう。この共感による認識に客観性は認められないだろうか。ウェーバーはこの過程に確実さを見出したのではないだろうか。

ここでわれわれは前節において示した実在の認識能力に関しての立場を思い起そう。われわれは，われわれをある対象の内部に移し入れて，この対象が持つユニークなところにわれわれを一致させるような共感を直観として，それによる実在の認識を可能とした。そして，追体験という作業は人の心という対象をこの直観によって認識する動作にほかならない。そうでなければ，こうした認識には基本的には客観性を認めるわけにはいかないだろう。検証資料も，それをめぐって行動した人々の動機がこのような形で十分認識されてはじめて，生きて利用されるべきものであろう。

わたくしは，この点にウェーバーの追体験，動機の意味理解という手法の客観性の主要な根拠が存在するのではないかと思う。なお，基本的には客観性を認めるわけにはいかない，といった際の，基本的には，というのは次のような意味においてである。すなわち，こうした認識が成立するには，われわれの側にある種の資質が要求される。つまり第1に，内的経験が十分に豊富でなければならない。対象の心との共感をえようと思っても，自己の側にそれに共鳴すべき共鳴箱が欠如していれば，それは獲得されえないであろう。第2に，心の

耐久力が十分に強くなければならない。

たとえば，われわれは日常生活においてある人の悲しみに耳をかたむけ同情をよせているような場合，時と共にわれわれの心が重くなってくるのを感じるのを経験しているはずである。意識をそらせたくなるのを感じたことがあるはずである。この場合の同情をよせるということは，ここでいっている意味での共感を通じて相手の心を理解しようとすることにほかならない。だから科学的認識の過程としてわれわれが，追体験による動機の意味理解を試みる場合にも，同様に，努めているうちに心の重みは増してくる。だが自然で無作為な共感をえようとすれば，この重みに耐えて内的経験の明確な共鳴が起きるまで待たねばならない。こうした意味での耐え性とか，耐久力とかいったものが養われていることが必要なのである。

しかしながら以上のことを完全な意味で考えると，われわれは結局何もできなくなってしまう。だから，実際にはわれわれはこうした資質を高めるべく努めると共に，それによる近似的な理解をこころがけることになるのだろう。こうした近似度は限りなく高めることができると考えてよいだろう。その意味において，基本的に客観的なのである。またその意味において，「シーザーを理解するために，シーザーとなる必要はない」。完全に「追体験できるということ」は理解の明証のために重要ではあるが，それは意味解明の絶対的条件ではない，[17] ともいえるのであろう。

さてこれまで考察してきたウェーバーの動機の意味理解という方法は様々な問題に援用できると考えられる。ここではまず，この方法を糸口にして，彼の実在観を推察してみよう。彼の追体験というものは換言すれば実在に対する共感を獲得することであると考えられた。だから彼の研究には実在という素材が存在しなければならない。具体的にいえば，彼が対象とするものは，かつてすでに実在した，あるいは，いま実在している個別的な人の心の動きである。そうでなければ，対象に心をそわせるということは不可能なはずである。つまり，これから展開されて実在化するであろうような心の動きは追体験の対象と

(17) ウェーバー，社会学の基礎概念，pp. 9～10.

なりえない。その意味でウェーバーの研究対象は未来というよりむしろ歴史であった。[18]

だがここで，われわれには，彼の論述は，歴史の研究を通じて未来にまで及ぶことができたのではなかろうかという疑問がわいてくる。あるいはできたかもしれない。ただしそれは次のような条件つきである。つまり，もしも彼が実在の本質を法則性であると考えていたならば，である。そうすれば彼は，個性的な動機の追体験をする上にとどまらず，さらにすすんで，そこにみられる法則性を見出そうとし，そこから一般理論を形成するという方向をたどったであろう。そしてそのような理論が形成されると同時に，彼は将来の論議に力を注ぐことになるだろう。

一般には，ウェーバーはリッケルトの科学認識論にしたがって，科学認識に二つの途を考えたといわれている。つまり，普遍に妥当する関係概念としての法則を追求するような認識方向と，個性的な事物概念としての個体を把握しようとする認識方向との二つの途を考えた，といわれている。ところが，彼の業績を概観すれば，彼の努力がほとんど個性的な歴史的個体の把握に集中的に注がれていて，普遍的な法則の追求にはほとんど注がれていないことが容易にわかる。また，彼は方法論的な論議の中でも，一般法則的な認識を必ずしも否定はしていないが，——むしろその役割はみとめているように言明しているが[19]——それ自体は社会実在の認識ではなくして，われわれの思考が社会実在を認識するために必要とするさまざまな補助手段の一つであるにすぎないのであって，経験的な実在を「法則」に還元することが，科学的研究の理想的な目的とみなされるべきだという意味においての文化現象の「客観的な」とりあつかいというものは無意味である，との旨を述べている。[20]

---

(18) われわれの科学は経済的な文化諸現象を個別的な原因に——それには経済的な性格のものもあれば非経済的なものもある——因果的にさかのぼらせてゆくかぎり，われわれの科学は「歴史的」認識を追求しているのである。ウェーバー；社会科学および社会政策の認識の「客観性」，前掲書，p. 83. 参照。

(19) ウェーバー；社会科学および社会政策の認識の「客観性」，前掲書，p. 83. 参照。

(20) ウェーバー，同上，p. 85. 参照。

ウェーバーにとって歴史的研究の中から一般法則をひき出すことはどうしても出来なかった。それは彼が自分の研究対象の奥深いところに法則性が存するなどという考えを否定したからにほかならないだろう。つまり，彼にとっての実在の本質は法則性というよりむしろ，創造性であった。だから彼にとって歴史は，不断に創造的なる実在の展開の軌跡にほかならなかった。追体験とはその軌跡を追跡する一手法であった。したがって，彼の歴史学はそれ自体として自己完結的なものとなるしかなかったのである。

さてそうであるとすれば，この立場はわれわれに，様々な問題の所在を照らし出してくれるようにみえる。なかでもこの立場からまず第一に明確化されるのは，政策論というものの不確実性不安定性であろう。つまり，政策論議というものは将来のことにかかわる論議なのだが，将来というものはなにかというとそれは，これからなされる実在の展開にほかならない。こうしたものは，本質的に創造的なだけでなく，論議している時点では未経験なものである。むろんこうした対象には，追体験という手法はあてはまらない。その意味でも論議の確実さは限定されるのであるがさらに未来の論議は，実在の展開にしたがって妥当性を持ったり持たなかったりする。そうした意味で不安定なのである。そして，政策論議にはこうした特性がつきまとう。そこでこの視点から，マネジリアルな学説をながめてみよう。

一般にある学問分野を形成していく際の研究者の研究動機として，われわれは知的興味と社会の実践的要請への関心をあげることができるが，社会科学部門の諸学科の場合は当初はほとんど後者によってかたちづくられたとみなされる。むろん研究者の知的興味もそれにあずかるのであるが，そうしたものは，通常多くの研究者を結集し，彼らに共通の観点からの研究を試みさせ，一応のまとまりのある知識体系を形成させるような直接的な力とはなりえない。むしろわれわれが社会生活を営んだり，あるいは，国家をはじめとする諸機関が活動をしていくのに，それらをどのようにしていったら良いのか，という関心がその処方策を考えさせ，それが知識の体系として形成されていったとみるのが，妥当であろう。経済学における当初の重農主義経済学にしても，あるいは

重商主義経済学にしても，それらには，国家財源の確保と運用の処方策的な色彩が濃厚であったことはよく知られている。このように経済学もはじめはもっぱら実践的要請によってリードされた。

ところが，そうして，しばらくすると，その分野にたずさわるものの中に，知的興味を中心にして研究をはじめようとするものが出てくる。その代表的なひとりは，いうまでもなくウェーバーであって，彼によってこれまでにも触れてきた経済歴史学の分離独立がなされたことは周知のことである。が，ともかくこのようにして，社会の実践的要求への関心と，知的興味との両方にリードされて，どちらの要請にも応じられうるような学問が成立することになる。

マネジリアルな学も少なくとも当初は，実践的要請にリードされて形をととのえてきていることにかわりない。たとえば，ドイツ経営学において，いわゆる近代経営学は，次のごとき条件のもとに成立したといわれる。つまり，ドイツにおいて工業が発達し，それがしだいに生産経済の典型的なものとなる。そしてそれが大規模経営に発展するにつれて経営経済としての複雑な問題に対拠する必要性が生じ，それが当初この学問分野を強くリードした。また合衆国経営学の事実上の出発点とされているテーラーの科学的管理法も，やはり実際的必要から生み出されたことはよく知られている。われわれの専攻するマネジリアル・マーケティング論においてもそうである。従来の流通活動諸知識が，製造業者からするマネジリアルな観点に統合されていったのは，やはり，オリゴポリストの販売活動を中心とする経営諸活動が，最終需要者の動向を基点としなければならなくなったという事情のもとであった。

そして，われわれのよく知っているように，これらのマネジリアルな学は，経済学などと比較していってももちろんであるが，それ自体としても現在まだ若い学問分野である。前述の例でみれば，ドイツ近代経営学の端緒といわれるニックリッシュの「私経済学としての一般商事経営論」が出されたのが1912年であるし，テーラーの「科学的管理法の原理」は1911年に出されている。また，マネジリアル・マーケティング論が，いわゆる製品計画を中核にすえた本格的なものとして開始されるのは1930年代である。(21)

このように若いマネジリアルな学では，いま述べたようにどうしても実践的処方論議が大きな位置を占めることになる。一方，ウェーバー的な立場からすると，こうした論議には，不確実性，不安定性がともなわざるをえなかった。このいわば，政策論中心の不安定性が，時々あらわれるマネジリアルな学への不信感の一つの原因になっていると思える。またその特性は技術論——この場合明らかに科学に対比させ軽視した意味で用いている——というきめつけ，がマネジリアルな学になされるときも，その理由の一つとなっていることが多いのである。

さて，しかしながら，このような政策論のもつ不安定性は全く対処不可能なものであろうか。そうではなくて，そこにもまたいくらかの，確実性をもたらすべき根拠があるのではないか。もしあるとすれば，それはどの様なものであるのか。次稿ではこういう観点から，政策論を広く技術論としてとらえなおして，いま一歩考察をおしすすめてみようと思う。

<主要参考文献——注記以外>

・アンリ・ベルグソン，ベルグソン全集（白水社）7
・マリアンネ・ウェーバー，大久保和郎訳，マックス・ウェーバー・II
・出口勇三，ウェーバーの経済学方法論
・ロジェ・ガロディー，森宏一訳，認識論・上
・ウィリアム・ジェイムズ，桝田啓三郎訳，プラグマティズム
・C・ライト・ミルズ，本間康平訳，社会学とプラグマティズム
・小林秀雄，考へるヒント
・小林秀雄，少林秀雄全集（新潮社）第十二巻
・大塚久雄，経済史学からみた経営史の問題，大塚久雄全集（岩波書店）第9巻
・岸田純之助，技術——その周辺——
・鈴木保良，商業学
・荒川祐吉，現代配給理論
・古川栄一，経営学通論
・Perry Bliss, ed., Marketing and the Behavioral Sciences.
・Kernan and Sommers, ed., Perspectives in Marketing Theory.

(21) 片岡一郎，流通経済の基本問題，pp. 236～237. 参照。